



[春の人権啓発行事の様子]

【この活動の概要】

主な活動	国際的なネットワークを生かした研究活動
関係機関	トロント大学、他
実施時期	2009 年より

【先生に直接聞いてみました】

—— この取り組みを始められた経緯を教えてください。

井谷 私は高校を卒業後、オハイオ州立大学に留学をしました。もともと私はスポーツが好きでずっと陸上競技をしてきたんですが、女子と男子に対する扱いの違いや期待の違いなど、いわゆるスポーツや体育におけるジェンダー問題が、私のスポーツ経験をかなり限定的にした、言うなれば傷つけたということがありました。体育やスポーツに係わる人間になりたかったのですが、高校生だった私には、私が嫌な思いをした当時の体育教育を作ってきた国内の体育大学に進学することに魅力を感じませんでした。加えて、もう少し単純な理由でいうと、これからは英語が必要になる時代だということをぼんやりと考えていたのもあって、漠然とジェンダーとスポーツであればアメリカに留学することがいいのではないかと、高校生の当時に考えたことですから（笑）、単純に考えて留学をしました。

学部生の間は、オハイオ州で体育の教員としてのトレーニングを受けながら、スポーツにおけるジェンダー問題について主に北米の研究を少しずつ学んでいました。その時お世話になったある先生の批判的なスポーツ研究が非常に面白かったので、実際にスポーツとジェンダーをテーマに研究者の道に、つまり大学院に進むことにしました。

私が修士号を取得したのが2008年だったのですが、その当時ちょうどスポーツとジェンダー、男らしさと女らしさとかの問題だけではなく、セクシュアリティ、いわゆる LGBT の人権問題がいかにスポーツの中でも深刻かということが研究され始めていました。私自身もスポーツにおける「男女の平等」の問題を扱うだけでは、例えばトランスジェンダーの人がスポーツから排除されている問題が解決されないのではないかとこの気づきがありました。つまり、性的マイノリティー、あるいは LGBT の人々とスポーツの問題を突き詰めなければ、結局スポーツのジェンダー平等とは何かという問いに対する結論は出ないのではないかとこのことを考えるようになりました。

ところが、トランスジェンダーのスポーツ参加といったスポーツとセクシュアリティ研究は、当時私が在籍していたオハイオ州立大学ではあまり教えていただける先生がいませんでした。そこで、そのような研究をされている先生を探したらカナダのトロント大学にヘザー・

サイクス先生がいらしたので、「あなたのもとで勉強させてください」と研究計画書を出して、受入れて頂きました。それが今でも続くサイクス先生との共同研究の始まりです。

オリンピックと社会問題についての研究に何故取り組むようになったかということですが、スポーツの中で同性愛者の方が差別をされるとか、トランスジェンダーの方が参加する枠組みがないという問題についての研究蓄積は、多くはなかったですが、あったことはあったんです。私も最初、性的マイノリティ、LGBTの人たちがスポーツの中でどういう風にも人権運動に取り組んできたのかということや、今はどういう状況なのかということの研究していました。私がトロント大学に進んだ2009年当時、カナダは翌年の2010年にバンクーバーオリンピックを控えていました。ですから私は当初、オリンピックも性的マイノリティに対する差別問題をかかえているのであれば、どうやったらオリンピックの中でLGBTの人たちが、もっとオープンに活躍できるようになるのか、ということに関心がありました。ですが、これはサイクス先生に教えていただいていた本当によかったなと思うのですが、先生は『スポーツの中のLGBTの人権っていうけども、オリンピックのようなメガイベントが行われることで生きづらくなるのはLGBTの人々だけに限らない。抑圧や排除をもたらすオリンピック全体の問題を取り上げないで、そこにLGBTが参加する権利だけを中心として位置づけてしまうことは問題なのではないか』という指摘をされました。サイクス先生自身もそういう視点から、バンクーバーオリンピックについての研究をするということで、私はリサーチアシスタントとしてサイクス先生の研究に参加しました。実際に研究が進んでいくと、オリンピックと人権問題をめぐる状況はサイクス氏が指摘した通り複合的で複雑でしたし、今まで気付かなかったスポーツ・メガイベントの大きな問題というのが徐々に見えてきました。



〔トロント大学 ヘザー・サイクス教授〕

トロントにいた2009年から2016年までの7年の間に、スポーツ・メガイベントの研究を、ジェンダーに限らず色々な角度から批判的に研究する取り組みが欧米諸国のスポーツ研究の世界でかなり勢いを増してきていました。一方で、日本では日本社会に大きな影響をもたらす東京オリンピックの開催が決まってからも、オリンピックに批判的な研究に対する抵抗がものすごく強くて、それはオリンピックの関係者だけではなく、スポーツとジェンダーを研究する学者の間でも同じです。それに気が付いてから、それでもやはりこの研究は日本にも根付かせなければいけないという、強い覚悟のようなものが生まれました。それが私のスポーツ・メガイベントが人々に与える影響についてジェンダーとセクシュアリティの観点から研究するという現在の私の活動に至るまでの長い流れです。

—— 具体的にどのような内容ですか？

井谷 こういうテーマはマスコミはまず取り上げないですね。やっぱり言いにくいですよ、これだけ国を挙げたイベントにしようとしているわけですから。日本の中にいると、オリンピックに反対する立場からは発言がしにくいこともあってか、なかなかデータが集まらないですし、研究の蓄積も浅いです。ですから海外の人と情報交換がより重要です。

東京でのオリンピックは2020年だけですが、オリンピックの特性として夏冬合わせて2年ごとに動いていきます。ですから、じっくり10年間1箇所にとまって研究すればいいテーマではないんです。日本で得られたデータや知見を次にオリンピックが開催される街にどう生かしていくのか、これまでオリンピックが行われてきた街で積み上げられてきた研究を日本でどう生かすのか。これらを効果的に行うにはかなり国際的な研究の連携を必要とします。ですから、これは日本の中でローカルな問題としてだけ取り扱えるものではなくて、国際的なつながりが必要な研究領域といえると思います。難しさという点では、こういう世界中を移動するスポーツイベントをジェンダー視点からどう分析するのかという理論的な問題もありますが、具体的な問題としてはそうやってすぐに移動してしまう事象を国際的にどう連携しながら情報を共有し、研究成果を出版まで持っていくのかということと、オリンピックの開催地決定から実際に開催されるまでの短い期間にそこで起きる問題をどう社会に研究成果として還元していくのかということが非常に難しい部分だと感じています。

—— 情報発信としては、文字にしていくことがありますね。



井谷 そうですね。他には、例えば今年の春の人權啓発行事の講師としてサイクス先生を招聘したのですが、それは公開講座という形で、地域の方にも開かれた形で、批判的なオリンピック研究をできるだけ多くの人に知ってもらう活動をしなればいけないと感じていたからです。学術論文を出すことは大切ですが、そうすると読む人が限られてきます。ですから、こういうトークイベントをできるだけやっていきたいですね。それから学術書にこだわらないで、例えばニュースのコラムなどを書けるとよいなと思っています。この分野で、アメリカで活躍されているジュールス・ボイコフという研究者がいます。アメリカのパシフィック大学の教授で、元々スポーツとジャーナリズムが専門分野ですが、彼はニューヨークタイムズ紙やガーディアン紙のような国際的に発信力のある新聞やメディアに多くの記事を寄せています。彼はかなりスピーディな書き手で、本もどんどん出しています。研究を論文にまとめて学術の世界で認められるということもおろそかにしていませんが、その研究成果を一般の人に還元することを重視している点で、私にとってとても良いモデルです。



彼とスポーツジャーナリストのデイブ・ザイリンの共著がたくさんあります。ザイリンは大学の研究者ではないですが、ジャーナリストとして鋭いスポーツ研究をされている方です。ジュールス・ボイコフとデイブ・ザイリンはものすごく仲が良くてですね（笑）、第一線で活躍しているスポーツジャーナリストとスポーツ研究者がタッグを組んで情報発信をやっているんです。こういうスタイルが日本でももっと出てこないといけないと思います。日本では、研究者はテレビ等に招待されて初めてメディアに情報発信をする場合が圧倒的に多いですが、海外ではそうでなく積極的にジャーナリズムの一環として研究者が動くということが増えてきています。特に人文学、社会学系の分野ですね。いかに研究を社会に還元するかということが日本よりもっとシビアに問われているからかもしれません。

彼とスポーツジャーナリストのデイブ・ザイリンの共著がたくさんあります。ザイリンは大学の研究者ではないですが、ジャーナリストとして鋭いスポーツ研究をされている方です。ジュールス・ボイコフとデイブ・ザイリンはものすごく仲が良くてですね（笑）、第一線で活躍しているスポーツジャーナリストとスポーツ研究者がタッグを組んで情報発信をやっているんです。こういうスタイルが日本でももっと出てこないといけないと思います。日本では、研究者はテレビ等に招待されて初めてメディアに情報発信をする場合が圧倒的に多いですが、海外ではそうでなく積極的にジャーナリズムの一環として研究者が動くということが増えてきています。特に人文学、社会学系の分野ですね。いかに研究を社会に還元するかということが日本よりもっとシビアに問われているからかもしれません。

——苦労された点はありますか？

井谷 そうですね。国内のつながりも大事ですが、積極的に海外の学会やイベントに出て行って、海外の研究者や活動家の方たちと積極的につながりを構築し、情報交換をする人を見つけて、またそれを長く維持していくことは簡単ではないですね。

——今後の展開を教えてください。

井谷 今年（2017年）の夏に日本スポーツとジェンダー学会で、スポーツメイベントとジェンダーをテーマに扱いました。その時の論考がまとめられた論文が2018年の3月ごろに出版されます。

今やりたいと思っていることは、東京で活動されている方と連携して、オリンピック開催準備が急ピッチで進められる中で、再開発によって一番影響を受ける人々の現状がどうなっているのかという具体的な研究をもう少し深めていきたいと思っています。また、平昌オリンピックの問題を指摘し続けてきた研究者や活動家の方にも話を聞いてみたいと思っています。



研究者氏名	井谷 聡子
所属学部・学科等	文学部 総合人文学科 英米文化専修
職名（資格）	准教授
専門分野	北米と日本の身体文化、スポーツにおけるジェンダーとセクシュアリティ、人種と民族の政治
研究者情報	<a href="http://gakujo.kansai-u.ac.jp/profile/ja/87a3987a322eb72e.html">http://gakujo.kansai-u.ac.jp/profile/ja/87a3987a322eb72e.html</a>

発行：関西大学国際部 <http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/>



KANSAI UNIVERSITY